



1037
発行
2021年
5月15日
国鉄労働組合
新潟地方本部
発行責任者
清野 聡
編集責任者
教 宣 部

生きたて帰って来たから 君の絵を書きたいたい

無言館の絵画展 新潟市美術館

130点5つのテーマ

新潟市美術館で無言館の絵画展覧会が開かれています。日程は4月10日(土)から6月6日(日)となっています。

無言館は長野県上田市にあり戦没画学生の遺作を展示する美術館です。今回、新潟市美術館で130点・「望郷」「家族」「自我」「恋」「夢」の5つのテーマで紹介されています。



4月15日、展覧会に行ってきた。130点の絵画、画学生たちは、どんな思いで書いていたのか、いろいろ当時のことを感じられ一枚、一枚作品に触れてきました。

取材のお願いを

学生に突然召集令状がきて、限られた時間の中でしたが絵を書いた自分自身の思いを伝えたい。

4月15日、展覧会に行ってきた。130点の絵画、画学生たちは、どんな思いで書いていたのか、いろいろ当時のことを感じられ一枚、一枚作品に触れてきました。



4月15日、画学生の絵に触れて多くの方々に「無言館」に展示されている絵を伝えたいと思い、関係者へ取材のお願いをしました。

取材・5月8日

取材の前日、3点の質問をお願い



質問3点について

無言館の絵画展覧会の経緯について？

以前新潟市美術館で新潟の金子孝信さん(画学生)の作品の展覧会を開催し、多くの資料を所有していることから窪島さんが新潟に何度か来ている。そうしたことで新潟開催につながっている。

各絵画がどのような状況の中書かれていたのか？

窪島さんはスタッフ数名と全国の遺族に逢いにきました。そして絵にまつわる話を聞いたそうです。どんな背景で、どんな気持ちで書いたのか、遺族の方が語られたそうです。

絵の配色が暗く感じるので、展示場の照明が通常より明るくしていると話していたが？

絵の配色が暗く感じるのは、戦火の中で絵を守ってきたので多少汚れているのではないかと。それで通常より照明を明るくすることを学芸員、スタッフで話し合っていて、窪島さんに話し解っていた。



展示会場は土曜日とあってお客さんは多くいたように感じました。学芸員の方から説明を受けたあと、絵を見るとやはり表面が黒くなっているように思いました。家族の方々は戦火の中、絵を守ろうと必死だったと思います。厳しい環境の中だったと思います。絵は本当は明るくきれいだっただけではないでしょうか...

お客さんは多かった



いしました。当日は、10時から取材がスタート。はじめに学芸員の方から3点の質問に対して回答がありました。

無言館の絵画展覧会の経緯は？
5つのテーマ130点についてどんな状況で書かれたのか具体的に内容を書いた資料があったのか？
展示場の照明の明るさが通常より明るくしたのは？



画学生は、ほとんど20歳代で亡くなっている。画学生は、ほとんど20歳代で亡くなっています。戦地で病院で、さまざまです。日中戦争、太平洋戦争へ学徒出陣で戦死者は3百数万人といわれています。保存状態が良い絵は全体が明るくなっています。暗く感じるのは配色の関係もあるのでしょうか。



画学生は20歳代で亡くなっている

当時、画材はあまり整っていないからではないかと思えます。学徒出陣は、大学を繰り上げて卒業させ、特に文系の学生が最初に戦地に行ったそうです。

画学生が最後に書き残した言葉

「絵を書くのは、一に観察、二に観察」家の近くの観音崎の浜辺で水彩画のスケッチに励んだ。「海辺に寄せる波を見ていると、なぜ人間は戦争など起こすのだろうかと考えてしまう」と同級生に語った。

(高橋良松)

故郷の山形・温海での写生を好んだ。召集が決まった夜、ひと晩で書き上げた自画像があった。「もし戦死したら、葬儀は写真ではなくてこの絵を用いてください」と家族に言い残し旅立った。

(芳賀準録)

「死んだらお経がわりにメンデルスゾーンのヴァイオリン・コンチェルトのレコードをかけてくれ」と言い残して出征した。新の妹千枝子は新の同郷の親友、久保克彦(無言館収蔵作家)からプロポーズを受けていたが、返事をせぬまま、兄と、未来の夫だったかもしれぬ人を失った。

(原田新)



無言館・館主の窪島誠一郎さんの講演を4年くらい前に新潟県・妙高市で聞きました。その中で印象的な話がありました。画学生に召集令状がきて、「最後に、あなたの絵を書きたい」と。時間が無い中で学生は交際していた女性の絵を描きました。その絵は、まだ完成していないので「できることなら、また生きて帰って君の絵を描きたい」と言って戦地へ行きました。女性は彼が帰ってくることを信じて待ちました。郷里に親が進める方

がいたそうですが、それを断って待ち続けました。そして、あつという間に50年が過ぎました。女性は彼と同じ鹿児島県の出身、東京で出逢った時、郷里が同じことに感激し交際が進んでいったそうです。女性は50年待ちつづけました。50年間ひとり一生懸命、生きてきました。結婚もしないで歳をとりました。長野県上田市の無言館に自分の絵が展示されているのを聞き、年長のおばあちゃんになったが、鹿児島

50年間ひとり一生懸命生きてきた

県からひとり長野県上田市の無言館にやってきました。女性は、逢いたかった・・・と。50年前の私の絵を書いてくれた、あの頃と同じようですと・・・

編集後記

学芸員の方と、いろいろ話ができる。画学生の作品に対しての考え、思いなど、いろんな角度で触れることや、感じる事ができました。

大変な戦時中、絵を書くことに対して一生懸命だったこと、なによりも大好きだったことがわかりました。画学生の絵は今も生き続けています。たくさんの方に絵に触れていただいて、その時の画学生の思いを感じて欲しいと、強く思いました。

取材は浅見さんに、お願いし2人で取材をしました。新潟市美術館、学芸員、スタッフの皆さん、ありがとうございました。感謝しています。

